
些細な会話も、

北川瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

些細な会話も、

【Nコード】

N9475Q

【作者名】

北川瑞稀

【あらすじ】

今は遠い日の思い出。何も変わらない。ただ、関係だけが変わっていく。

サイトからの再掲載です

「肉まんのほうがいいだろ！」

「いや、ピザまんのほうがいいネ！」

「つか、オレの金なんだから、オレがどう使おうと勝手にさア！」

「勝手じゃないアル、奢るって言ったネ！」

「…奢られるっていう上の立場だからって、選択権があると思わないで下せエ」

「何でアルか！」

今夜は、雪が降りそうな雲がかかっていてよく冷えている、そんな夜だ。

そんな日に街の見回り当番になってしまった総悟は、面倒くさいと思いながらも、仕方なく歩いていた。

しばらく歩いて、見覚えのある人影を見かけた。彼女はいつもの薄着のまま、傘も持たずに立っていた。

「……………」

「…こんなところで、何してるんでイ」

呆れたと言うように総悟が言うと、神楽は何も言わずに彼に抱きついた。その体があまりに冷たくて、総悟は驚く。彼女の体を離す

と、風邪引くぞと言いながら、神楽に自分の上着を着せ、首にマフラーを巻いた。彼の温もりが、まだその上着やマフラーに残っていて、温かかった。

その青いマフラーは前に神楽が編んで、プレゼントしたものだ。大事に使ってくれているのだと、神楽は嬉しくて、でも少し気恥ずかしいので、小さな声で言った。

「…ありがとう」
「ああ」

総悟も、神楽も、吐く息が白い。本当に寒いのだということが伺える。

静かな夜だった。聞こえるのは、時折通る車の排気音と、二人の吐息だけだった。

「…あ」
「…あ？」
「雪…」

空を見上げると、白い粉雪が舞っていた。神楽は手を翳し、雪を掴もうとする。そんな神楽の冷たい手を取って、総悟はギュッと握る。

「……あったかいアル」
「そりゃよかった」

この小さな手が、小さな体が、あんな怪力を秘めているなんて、信じられない。信じられないけれど、それは事実だ。事实は、変えられない。変える必要もない。

白い肌、桃色の髪。雪の中に、溶け込んでしまいそうだ。

「…肉まん、食べますかイ？」
「もちろんヨ」

期待していた答えが即時に帰ってきたので、つい笑ってしまった。いつもは怒る神楽も、何故かはわからないが、今日はただ静かに微笑んでいた。

「肉まんとピザまん買って、半分こしようアル」
「賛成」

ピザまんか肉まんかで喧嘩していた、あの頃。あの頃も、喧嘩をしながら、彼女が消えてしまわないか不安だった。

だけど、彼女は消えないでここにいます。だから不安に思うことはない。

あの些細な喧嘩も、些細な会話も、時折見せた笑顔も、全部心の奥にある。

今ではもう遠い日の記憶となってしまうたけれど、これからもずっと忘れないだろう。きつと、きつと。

（後書き）

サイトからの再掲載。

最近はずいぶん寒い日が続いてますよね…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9475q/>

些細な会話も、

2011年10月6日08時11分発行